

1. 被服設計に関する人体計測値の度数分布は、体型の個人差を把握する有力の手がかりであり、特に、被服サイズのカバー範囲やサイズ別の必要数量を設定する際の基礎として大きな意義をもつ。また、分布の正規性を検討することは、統計解析の手法を適切に選ぶためにも重要である。しかし、各項目の分布に関する研究は柳澤らの報告のほかあまりない。筆者等は本研究に先立ち、29項目について分布型を検討したが、被服設計上重視されている胸囲・胴囲・腰囲は正規分布とくらべ劣偏急尖型の偏りを示すようであった。そこで、この3項目の分布について、計測年を異にする3群の資料を対比し、観察を試みた。

2. 資料は、いずれも18~25歳の女子学生で、A群：1951~53年計測の柳澤による500人、B群：1961年計測の衣服寸法研究グループによる1605人、C群：1980年計測の大妻女大メジャーによる444人で、Bのみは公表された散分図から統計量を算出した。

3. 歪度では、3項目とも有意な劣偏型を示し、係数の値は、胴囲>胸囲>腰囲である。この傾向はA・B・Cの3群に共通である。尖度では、有意に急尖型と認められるのは、全ての群の胴囲、C群の胸囲・腰囲である。3群をくらべると、歪度・尖度両係数の正規分布からの偏りは、C群が他よりも著しい。また、群間における平均値の変化は、1~2cmにとどまるが、分散ではC群がかなり大である。ヒストグラムで出現の範囲をみると、最小値は群間でほとんど差を示さないが、最大値は計測年が新しい群ほど上側に位置していた。従って、C群で正規分布からの偏りが著しく、分散が大であることには、分布の上側に長く裾を引いているデータが関与しているものと考えられる。